

「従属節におけるアスペクトの研究」

熊本県立大学大学院文学研究科博士後期課程日本語日本文学専攻

和田 礼子

[論文要旨]

本研究では、従属節の持つアスペクト的特徴と、従属節の意味との関連性について分析を行った。ナガラ、テのように、複数の意味用法を持つ接続形式において、ナガラ節、テ節のアスペクト的特徴が、意味の成立と関連していることがわかった。

アスペクトは「出来事の時間的展開性(内的時間)の把握の仕方の相違」を表す文法的カテゴリーで、従来、日本語のアスペクト研究は、スルーシテイルといった形態論的な対立に基づくアスペクトの意味の対立を中心に研究が進められてきた。アスペクト研究のもう一つの流れは、共起する副詞成分、補助動詞などによって取り出される運動の局面に着目し、動詞が語彙的に持つ語彙アスペクトについて分析するというものである。幅のある時間を表す副詞成分との共起の可否による動詞分類も行われている。

このようなアスペクト研究の流れの中で、本研究では、スルーシテイルの形態的対立を伴わない接続形式によって構成される従属節の、アスペクトの意味を分析したという点に特徴がある。動詞が語彙的に、もともと持っているアスペクト的特徴の中から、文脈の中で取り出される運動の局面について言及し、これと、従属節の意味との関連を明らかにしている。

具体的には、第3章で、ナガラ節のアスペクト的特徴にもとづき、ナガラの用法を「逆接」と「付帯状況」とに分類した。「付帯状況」の用法では、ナガラ節のアスペクト的特徴は「継続」「変化結果の維持」「反復」で、主節との時間的關係は「同時」を表す。「逆接」の用法では、ナガラ節のアスペクトの意味はパーフェクトで、ナガラ節は主節に先行して動作・変化が終わり、その効力が主節時まで続いている。また、付帯状況のナガラ節はとりたてて詞「サエ」や「ハ」によって焦点化され、動詞句内に生起するが、逆接ナガラ節は、動詞句内には生起しないという構文的特徴を持つことを見た。「付帯状況」ナガラの中には、文脈によっては、主節との接続関係が逆接となるものもあるが、このような逆接は「文脈的逆接」とし、ナガラ節がパーフェクトであるというアスペクト的特徴をもつ「構文的逆接」のナガラと区別する。

付帯状況ナガラ節のアスペクト的特徴は、「動作の継続」か「変化結果の維持」である。ナガラ節のアスペクト的特徴は、動詞が語彙的にどのようなアスペクト的特徴を持っているかによって異なる。また、「継続」「維持」「反復」の局面を表すには「時間的な幅」が必要となる。

「変化結果の継続」を語彙的に持つ動詞にナガラが接続しても、付帯状況の文としては不適格であるが、「変化結果の維持」を語彙的に持つ動詞にナガラが接続すれば、付帯状況のナガラ文を作ることができる。変化結果を維持するためにはエネルギーの注入が必要で、このことから「変化結果の維持」は、動的な場面であるといえることができる。

さらに、付帯状況ナガラは「短時間の動作」か「長期的活動」かに分類することができ、「短時間

の動作」には、ナガラ節動作と主節動作との関係性が強い「方法・手段」の用法と、関係性が弱い「様態」の用法があることを述べた。

逆接ナガラ節のアスペクトは、スルーシテイル形式でアスペクト対立のある動詞の場合はパーフェクトを表す。ナガラ節のアスペクト的特徴がパーフェクトである場合、ナガラ節の事態は主節の事態に先行して実現する。限界動詞も非限界動詞も逆接ナガラ節を構成することができるが、非限界動詞がパーフェクトを表すには、限界点を付加し、ひとまとまりの動きとして捉えられるような文脈が必要となる。

また、逆接ナガラ節が表す場面に共通する特徴として、非動的場面であるということを指摘した。ナガラ節の動詞が「動作動詞であっても[動的]場面を表さない」のはアスペクトがパーフェクトである場合に限られる。パーフェクトはすでに完了した運動の効力が続いていることを表すため、その場面は非動的場面で、付帯状況ナガラとはこの点においても異なる。

アスペクトをどのように捉えるかは、ナガラ節の意味の認識に大きく関わるものである。第4章では日本語母語話者のアスペクト認識について論じた。日本語のバリエーションには、性差、世代差、地域差などがあり、アスペクトに関しては共通語と西日本方言とでアスペクト体系が異なることが知られている。しかし、このような異なるアスペクト体系をもつ西日本方言話者の共通語使用が、東京方言話者と違いがあるのかといった点については、まだ研究されていない。

本研究では、方言によって共通語形式であるナガラ節、テルトコ形のアスペクト認識が異なるのではないかと、という仮説を立て調査を行い、熊本・高知方言話者と東京方言話者では、共通語使用場面で、アスペクト認識に違いがあることを確認した。

2項対立のアスペクト体系をもつ東京方言と3項対立の熊本・高知方言との間に見られた相違は、熊本・高知方言のヨル形式が、限界動詞の運動の局面を捉えることの影響によるものであると考えられる。東京方言では「座る、立つ、乗る」+ナガラは結果維持の局面を捉えるが、熊本・高知方言では、進行の局面を表すことができる。これらの動詞は限界動詞であっても動作・変化の進行という動的局面を捉えることが可能動詞である。

また、3項対立のアスペクト体系を持つ西日本方言の間でアスペクトの捉え方は同じであるのかという問いに対しては、動詞によって差が見られた。テルトコとナガラはともに共通語形式であるが、その使用にあたっては東京・熊本・高知の各方言によって違いが見られた。このことがナガラ文の文法性判断にも作用し、日本語母語話者の間で文法性判断が異なるという現象になって現れると考えられる。

第5章では、コーパスを利用して、ナガラ文の使用分析を行い、さらに、付帯状況という用法をもつテ節との置き換えの可否を通して、ナガラ節、テ節のアスペクト的特徴について論じた。また、日本語学習者の誤用分析に見られる、付帯状況ナガラの使用条件について分析した。

付帯状況を表すテとナガラは、テ節・ナガラ節が動作継続の局面か、結果継続を維持する局面を表す場合、置き換えることができる。テ・ナガラ節の置き換えの可否は、テ節が「動作継続」あるいは「結果維持」を表すか否かによって左右されるものである。

テ節の動詞が「動作継続・結果継続維持・反復」というアスペクト性を持つとき、テ節は「付帯状

況」を表すが、「顔を洗って、ごはんを食べる」のような完成性を持つと、継起を表す。アスペクトと意味の関係は表裏一体で、テ節が完成というアスペクト的特徴を持っていない場合、継起の意味は成立しないし、継起の用法が成立するためにはテ節は完成でなければならない。

ナガラとテはナガラ節、テ節が「心的状態」を表す場合や、維持の局面を持つ主体変化動詞の場合、置き換えることができるが、ナガラ節、テ節が主体動作動詞の場合、置き換えることがむずかしい。「主体動作動詞+テ」では特別な文脈がない限り、「洗って」「読んで」は完成性を表し、「洗って食べた」「読んで答えた」のような継起性を表すが、「洗いナガラ」「食べナガラ」は付帯状況文では継続を表すため、置き換えることができない。

テとナガラでは動詞に接続した場合、取り出される動詞の局面は異なり、意味、用法も異なる。接続形式によって取り出されるアスペクト的特徴は、その形式ごとに異なるが、取り出される局面が、動詞の種類によって限定されていること、アスペクト的特徴と、意味、用法が相関しているという点については、共通しているといえる。

第6章では、限界動詞の運動局面の焦点化という観点から「徐々に」「～はじめる」「ヤスイ・ニクイ」「ナガラ」について考察した。ヤスイ・ニクイとナガラは、動詞のどの局面を取り出すのかという点では違いが見られるが、それぞれの意味用法とアスペクト的特徴が相関しているという点で、共通している。

従属節ではないが、「行為遂行の難易」を表す「ヤスイ・ニクイ」という表現形式でも、アスペクト的特徴と意味用法が相関する。「ヤスイ・ニクイ」には3つの用法があるが、「行為遂行の難易」を表す場合、動作の継続が取り出され、「心理的な要因による行為遂行の難易」と「傾向性の大小」を表す場合、完成性が求められる。「ヤスイ・ニクイ」においても、その意味が実現するためには、特定のアスペクト的特徴が指定されているといえる。

表現形式の意味の実現のために必要なアスペクト的特徴を表すため、テイル形式では取り出されない運動の局面を取り出す操作が行われることがある。例えば、運動の局面を取り出す表現形式の中には、「ゆっくり落ちた」のように、テイル形式では取り出されることのない動詞継続の局面を、スローモーションを見るように、といった心的な操作を駆使して、取り出すことで、「ゆっくり」の意味の実現を図る。本稿ではこれを運動の局面の焦点化と呼んだ。

付帯状況ナガラでも、「電話を切りナガラため息を一つついた」のように、非常に短い時間で成立する運動であっても、その運動の継続の局面を取り出すことができる。このような運動の局面の焦点化が起こるのは、それぞれの表現形式の意味が成立するためには、運動の継続という要素が必要だからだ。

アスペクトに関わる問題を、動詞が本来持っている語彙アスペクトと、文を構成する要素によって引き出される従属節のアスペクトという視点で、分析を進めてきた。語彙アスペクトは、副詞や接続形式の特性によって、引き出されるアスペクトの局面が異なる。本研究では、ナガラ、テを中心に考察を進めたが、さらに、範囲を広げ、さまざまな表現形式について、分析を進める必要がある。